湯壺の蜘蛛

挿絵：清水鉄也

むかしむかし、この岩戸に伝次さんというとても魚釣りの好きな男の人がおったげな。昨日でやっと、田植えも終わったことだし、今朝はもう早くからわくわくして、「ほうじゃ、今日はひとつ…湯壺までいっちゃりましょう。」わらじもいつも履くのじゃあいけんと思うて、この日は、鼻緒が角結びというしっかりしたので足ごしらえをして出かけたんだと。

さあ、湯壺に着いた。滝から落ちる水が歩いてきた体に気持ちがええ。深い淵には鮠やら、山女やら大きな魚の影が見えるし、伝次さんは糸をたらして、今か今かと魚のかかってくるのをじっと竿の先を眺めて待ちよった。すると…水の中からこんまい蜘蛛がでてきたげな。

伝次さんが見よったら、蜘蛛は尻からシュルシュルーッと、糸を出して、わらじの鼻緒に巻きつけて、水のなかにポチャン…と潜(もぐ)っていった。
(いなげなことをするのぉ)と、不思議に思いながら眺(なが)めとったら、また。蜘蛛が水の中から出てきた。
出てきて、鼻緒にシュルシュルーッ…、で、また水の中にポチャン…と。

シュルシュルーッ。 ポチャン。 シュルシュルーッ。 ポチャン。 シュルシュルーッ。
ボッ…チャン…

おんなじことを繰り返すうちに…なんと蜘蛛は、だんだんおおきゅうなっていた。大きな蜘蛛が、巻(ま)きつけた糸をものすごい力で引っ張る。伝次さんはずるずるとひきずり込まれそうになった。
「こりゃあ、いけん。」と、さすがに伝次さんは怖(おそ)ろしゅうなってきて走って逃げた。

すると蜘蛛も淵から上がって追いかけてくる。伝次さんは後も振り返らずに走って。やっと棚原(たなばら)まで帰ってきて、「やれやれ…はあえかろう…」と振り返ってみたら。なんと三歳(さんさい)くらいの仔牛(こうし)ほどの大きさになった蜘蛛が、すぐ後ろを追いかけてきよる。「ひぇ～っ」伝次さんはますます肝(きも)を潰(つぶ)して走り出した。

三歳仔牛ほどの大きさの蜘蛛に追いかけられた。このあたりを、《三歳横手(さんさいよこて)》と呼び、わらじの鼻緒が切れるまで走ったこの峠を、《緒切峠(おきだとう)》とか《緒忘峠(おわすれとうげ)》とか呼ぶようになったげな。

さて、やっとの思いで伝次さんは麓(ふもと)の茶店(ちゃみせ)まで帰ってきた。やれやれと、煙草(たばこ)を一服(いっぷく)付けて休んでおった。…ふと今来た山の方を見たら…ありゃぁー。今度は、蜘蛛に真っ黒い羽がはえとる。そいつがブーンと飛んで追いかけてきた。

「やれ、しつこいのぉ～.助けてくれぇー」と、伝次さんはまた逃げる。逃げたこのあたりを《黒羽根(くろはね)》と呼び、さらに走って逃げて、振り返ってみたら、

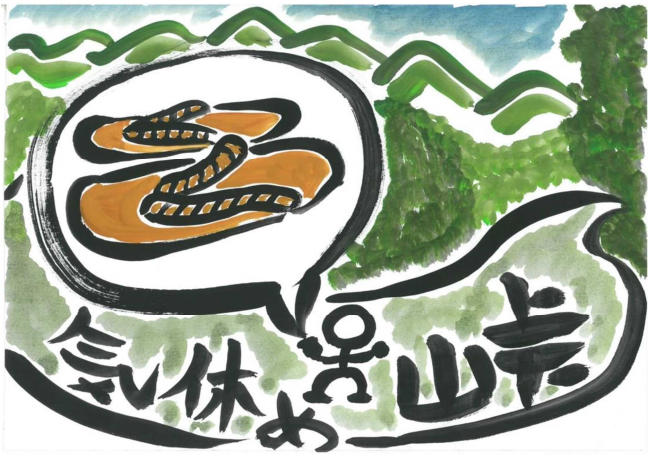
今度ぁ、赤い羽根になっとる。それでこのあたりは《赤羽根(ばね)》と、呼ばれるようになった。こんまい峠を越えたら下りだったので、一気に駆(か)け下りることはできた。

蜘蛛は追いかけてくる。困った伝次さんは、途中にあった水穴(みずあな)にはいってじっと息をころして隠(かく)れた。それで、ふと足下に気がついた。わらじの鼻緒に蜘蛛の糸がまきついとるじゃないか。

「ははぁー。これか、これか。」と、伝次さんはその糸をプッツリと切り捨てた。

するっとどうじゃ。あんだけしつこい怖ろしい蜘蛛が、伝次さんに気づかず、頭の上を飛んでいった。

それでこのあたりは、《穴(あ)け休(やす)み》と言うようになったげな。蜘蛛は左の道を飛んで行き、伝次さんは、右の道を本谷(ほんたに)から、岩戸へ帰り着いたげな。



「これで安心」と、一服したあたりを《気休(きやす)め峠》と呼ぶようになった。

そうそう、伝次さんの履いとったあの角むすびのわらじは、「こんだけ走って逃げることが出来たのは、この角結びのわらじのおかげじゃ」と伝次さんの言うのを聞いて、里の人達も魔除(まよ)けとして履(は)くようになったんだと。

これで、いびせぇ(怖(こわ)い)岩戸の蜘蛛の話はおしまいで。

けっちりこ。